



TITLE:

[研究報告5] 社会をよそおうオンナたち : ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール今昔

AUTHOR(S):

帯谷, 知可

CITATION:

帯谷, 知可. [研究報告5] 社会をよそおうオンナたち : ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール今昔. CIAS discussion paper No.50 : 世界のジャスティス --地域の揺らぎが未来を照らす-- 2015, 50: 35-43

ISSUE DATE:

2015-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228624>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

社会をよそおうオンナたち

ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール今昔

帯谷 知可

京都大学地域研究統合情報センター・准教授

1. はじめに

私は、近現代史に軸足を置いて、ウズベキスタンを中心に旧ソ連中央アジアの研究をしています。今日は、ウズベキスタンのイスラーム・ヴェールのお話をさせていただきたいと思います。

まず、ウズベキスタンといっても、あまり馴染みがないかと思うのですが、ソ連から独立した中央アジア5カ国のうちの1つです。現在、ウズベキスタンの人口は2900万に届こうかというところですが、民族別の住民構成を見てみると、おおよそ、ウズベク人が80%、ロシア人が4%から5%ぐらい、そのほかは同じぐらいの割合で近隣の中央アジア諸民族の人たちが続きますので、全体として、国民の約9割はムスリム（イスラーム教徒）であると言えます。ただし、信仰のあり方や、信仰実践の度合いを問わなければ9割ということです。ウズベキスタンのいわゆる伝統文化の基層を考えると、生活様式の上からはオアシス定住民の文化があり、言語的にはテュルク系、そしてイスラーム文化が非常に重要です。さらに、そこに19世紀から20世紀の歴史的経験として、ロシア＝ソ連文化というものがかぶさっている。加えて、1991年にソ連が解体すると、ソ連からの独立後の新たな国民文化ともいえるべきものが形成されつつある、そのような状況をまず認識しておくとういきたいと思います。そして、もちろん、その独立後の課題としては、民主化と市場経済化を進めながら、あらためて国民統合に取り組まなければならない、ソ連解体と独立から20年以上経った現在も、そうしたことが引き続き重要な課題となっている国です。

2. 2009年タシュケントでの出来事をきっかけに

まず、この写真をご覧くださいと思います（写真1）。私は初めてウズベキスタンに行ったのが1991年なのですが、それ以来ほとんど毎年



写真1 タシュケント市内にて（2009年筆者撮影）

にウズベキスタンを訪れていました。2009年に珍しく3年ぶりでウズベキスタンを訪れたとき、非常にショックを受けた出来事がありました。これは、まさにそのときの写真なのです。この1枚の写真のなかには、たまたまいろいろな服装をした女性が写っています。向かって左側の3人の女性はいわゆるイスラーム・ファッションをまとっています。真ん中のアイスクリームを売っているおばさんは、あまり肌を露出せず、長袖で丈もとても長いワンピースを着ています。反対側、右の若い女性は、半袖で膝丈のワンピース、私たちの目から見ればごく普通の洋装とっていいような装いです。私がショックを受けたのは、このとき、この、いわゆるイスラーム・ファッションに身を包んだ女性たちが、後から後から、続々と私の目の前に現れてくるという経験をしたからなのです。それまで、長年ウズベキスタンに通ってきたなかで、首都のタシュケントで、モスクやマドラサ（イスラーム学院）、聖者廟といったイスラーム関連施設とはまったく関係のない場所で、こうしたイスラーム・ファッションをした女性たちがこんなにたくさんいる光景、イスラーム・ファッションやイスラーム・ヴェールが良いとか悪いとかそういうレベルの問題ではなく、とにかく、こんなウズベキスタンの光景は今までは見たことがないと、とてもショックを受けました。そのショックが、思った以上に強かったことに自分でも驚きまして、

あら、私、どうしたんだろう、何にショックを受けているんだろう、というような思いにとらわれました。

今日のお話はこんなことを枕にしまして、シンプルな問いを立ててみたいと思います。ムスリム人口が9割を占めるウズベキスタンでイスラーム・ヴェールが公的には「好ましくないもの」とされるのはなぜか、という問いです。ソ連時代にイスラームが弾圧されていたのだとすれば、独立後はその信仰が自由になったのだから、ムスリム人口が9割を超えるこの国で女性がヴェールを着けるようになっていてもおかしくはないでしょう。しかしながら、世俗主義を強く主張する現在のウズベキスタンでは、公的には、政府の見解や概して政府の影響の下に置かれているメディアなどにおいて、イスラーム・ヴェールというのは、好ましくないものと位置付けられており、決して公には肯定されません。このことは、ウズベキスタンが経験してきた近代と深く関係しています。

3. ウズベキスタンのイスラーム・ヴェール

それをひも解いてみるために、次に、この写真をご覧くださいませ（写真2）。ぱっと見ただけでは何の写真かよくわからないかもしれません。1920年代のウズベキスタンの街角で撮られた写真で、女性が2人こちらに向かって歩いています。ウズベキスタンの女性たちがその頃常用していた伝統的なイスラーム・ヴェールは、パランジと呼ばれ、こうした形状のものだったのです。どういうことになっているかといいますと、頭からすっぽりとかぶっているのは、ベルベットのような分厚い生地 of 丈の長いコートまたはガウンのようなもので、長い袖が付いていて、その袖は背中側に縫い止めてあり、そこに腕を通すことはありません



写真2 「識字学校（リクベズ）へ」 マクス・ペンソ撮影
1927年 [Khodzhev 1989: 104-105]

ん。そして、顔の前には馬の尻尾の毛で編んだ長いすだれ、あるいはネット状のものを付けているのです。女性たちは、外出するときには、このパランジを着用しなければなりません。この写真は1927年に撮影されたもので、「識字学校へ」というタイトルが付いています。識字学校については少し後でまた触れたいと思います。

19世紀後半ロシア帝国に征服された中央アジアは、1917年のロシア革命によって社会主義化の波に飲み込まれます。そして、ソヴィエト政権の下で、1920年代の後半という、かなり早い段階から、「フジウム」という名称で知られる、共産党主導の上からの女性解放運動が展開されました。その背景には、社会主義的な無神論イデオロギーと世俗化の徹底、中央アジア諸民族の中東イスラーム世界との隔絶と社会主義的改造、社会主義建設と社会主義的近代化という課題がありました。この社会主義的近代化は、ソ連の各民族共和国を単位として実現されていきますが、1924年にウズベク・ソヴィエト社会主義共和国ができ、ウズベク人の国、ウズベキスタンがその舞台となりました「フジウム」というのは、現地のテュルク系の言葉で、「攻撃」とか「突撃」という非常に勇ましい意味をもつものです。ロシア革命前に現地に存在していた、あらゆる「悪しき」慣習と伝統を攻撃して根絶するという、そういう勇ましいスローガンの下に進められた近代化のキャンペーンを、フジウムと呼びました。そして、フジウムの中核になっていたのが、女性解放運動でした。ですから、女性解放運動そのものを、しばしばフジウムと呼びます。

4. ソ連体制下の女性解放運動とパランジ

運動の中心になったのは、共産党の婦人部で、ウズベキスタンの場合には当初は主にロシア系の女性たちが指導的な立場に立って、上からのかなり性急でまた強制的な側面も含む女性解放運動を展開していこうとしました。当時はソ連全体で女性解放運動が開始された時期でありまして、これはソ連の中央でさえ、かなり壮大な実験であったと言われています。社会主義の下で男女平等を実現する、女性の社会経済活動参加を促進する、さらに家事育児を社会化するというスローガンが叫ばれていました。特に中央アジアの場合には、女性を労働力として確保すること、イスラームの影響から引き離すことが女性解放運動の目的のなかに含まれていたと言われています。このキャンペー

ンのなかで、「攻撃」の対象になったのは、ウズベキスタンの場合には、イスラーム・ヴェールすなわちパランジの着用と、女性が家長の許可なく外出を許されない状態に置かれていること—「女性の隔離」とよく言われると思いますが—この2つの問題でした。

パランジとは正確には頭からかぶっているコートのみのもので、顔の前に着けているネットは、チャチヴァンというのですが、しばしばこの2つをセットで着用している状態を「パランジを着けている」と表現します。ソヴィエト体制下でパランジは、「悪しき」伝統の象徴となりました。パランジを付けている女性は抑圧された存在である、パランジは、馬の尻尾の毛でできているので不衛生だし、呼吸を妨げ、日光を遮断するから不健康だ、などと言われました。それからまた、これはどういうロジックかなとも思う部分がありますが、パランジを付けているような女性は、顔が隠れるので不道德な行いに走りやすいとも言われました。こうして徹底的にパランジは悪しきものだというキャンペーンが繰り返されていったのです。実は同じようなロジックは、帝政ロシア時代からロシア人たちの中央アジアを見る眼差しの中に織り込まれていましたが、社会主義の下ではウズベク人女性は、女性だけではなく男性も含めたウズベク民族の代表だという言説が力を持ち、パランジを付けた女性が存在するような民族は進歩的ではありえないから社会主義建設を担うことができない、民族を社会主義的に改造するためにはまず女性解放を成し遂げなければならない、といった論理展開がされました。

1927年の3月8日—国際婦人デーですが、社会主義圏では非常に重要な国際的祝日として、現在でもよく祝われていると思います—この日を端緒として、ウズベキスタンでは大規模なパランジ掃キャンペーンが行われることになります。街の広場などに集まって、一斉に女性たちがパランジを脱ぎ捨て火にくべるというパフォーマンスが繰り返され行われていきました。そして、女性はパランジを着けない、男性は妻や娘など身内の女性にパランジを付けさせないということが、政治的に正しいウズベク人に不可欠なことなのだという認識が広められていくようになります。1927年以降40年代に至るぐらいまで、それ以後も基本的にはそうだと思いますが、パランジを着けているかいないかということが、政治的な外見として、非常に大きな意味を持つようになり、「パランジの放棄」は、さまざまな集会や党の大会などで必ず言及し

なければいけないトピックになっていったと言われています。

図1は、『赤きウズベキスタン』というウズベキスタンの政府・共産党系の新聞で、パランジ根絶キャンペーンが開始された1927年3月8日号の第一面です。中央のイラストを見ますと、パランジを脱ぎ捨てた女性—はりと脱ぎ捨てたパランジが足元に丸まっています—が、明るい未来に向かって手を差し伸べており、これから新しい生活が始まるという希望に満ちたイメージが伝わってくるかと思います。



図1 『赤きウズベキスタン』 Qizil O'zbekiston 1927年3月8日号第一面

図2も同じく、1927年の3月8日号、ウズベキスタンのコムソモールの機関紙『東方のコムソモール員』です。「東方の女子たちにもっと広く門戸を開こう」という特集が組まれており、中央に325という数字が見えますが、ここには、タシュケントの旧市街で325人の女性が3月8日にはパランジを脱ぎ棄てることを誓って署名をしたという記事が掲載されています。右下のイラストを見ると、これがまたたいへん象徴的なのですが、パランジを脱いだ女性が、工場で働き、勉強し、家事育児をする姿が描かれています。ソ連解体後、ジェンダー論などの分野では、ソ連では、女性解放が声

高にうたわれ、そして実現されていったように見えるけれども、ソ連圏の女性は結局のところフルタイム労働、家事、育児、近所付き合いや親戚付き合いのすべてを担うということで、二重苦、三重苦の状態にあったということが指摘されたりもしています。



図2 『東方のコムソモール員』 *Komsomolets Vostoka* 1927年3月8日号

5. パランジを棄てる道のり

ここからは、オンナたちの装いをめぐって歴史的紙芝居をしてみましょう。写真3は識字学校—ソ連時代初期に大人向けに読み書きや簡単な計算能力の獲得のため、近代化政策の一環として各地に設置されたもの—toに学びに来た女性たちです。ちょうど、ウズベク語の文字がアラビア文字からローマ字に移行したこともあって、こうした識字学校が各地に開かれました。女性向けの識字学校の場合には、パランジを着けていてもいいからとにかくいらっしゃいということで、集まった女性たちをロシア人女性らの先生たちが徐々に説得して、パランジを脱がせるよう感化していきました。

写真4は、「顔をあらわにする決意」というタイトルが付いている1927年に撮影された写真です。勇気を持ってパランジを脱ぎ去る女性への賛辞を象徴するような写真です。

写真5これも同じく識字学校の様子で、「最初の自由のツバメたち」というタイトルが付いています。「ツバメ」はロシア語で女性に対する愛称としてよく使う表現です。ここでは女性たちはパランジを着けていますが、チャチヴァンは上げ



写真3 「ママたち勉強中」 マクス・ペンソン撮影 [Khodzhev 1989: 33]



写真4 「顔をあらわにする決意」 マクス・ペンソン撮影 1927年 [Khodzhev 1989: 29]



写真5 「最初の自由のツバメたち」 マクス・ペンソン撮影 [Khodzhev 1989: 38-39]

て、顔を出し、勉強しています。

こちらの写真6になりますと、パランジを着けている女性と、付けていない女性が混ざり合っています。さらに写真7では、パランジを着けている女性は1人もいなくて、おおむねすべての女性が白っぽいスカーフを付けているような姿になっています。「パランジー掃」「パランジは封建制の遺物」といったスローガンが掲げられています。



写真6 マクス・ペンソン撮影(D. ホジャエヴァ氏より提供)



写真8 「結婚します」 マクス・ペンソン撮影
[Khodzhev 1989: 45]



写真7 マクス・ペンソン撮影(D. ホジャエヴァ氏より提供)



写真9 「ヴォロシーロフ称号保持者の射撃」
[Khodzhev 1989: 44]

この写真8などは、ソヴィエト的な明るいウズベク人家族を象徴するような写真だと思います。後ろにレーニンの顔が見えていますが、若い男女が結婚登録所にやって来たときの写真です。

女性も共学の学校に通って、体育の授業なども受けるようになり、スポーツにもいそしむようになります。やがて、写真9のように、ライフル射撃の選手として名をはせた女性たちも出てきます。ライフル射撃や、あるいはパラシュート降下といったような、いわば「男らしい」スポーツ種目にも、ウズベク人女性が進出していくのです。強靱な体力と知性と母性を併せ持ち、社会にどんどん出ていく女性、こうした女性をめぐる言説やイメージは、社会主義建設を喧伝する材料としても使われていきました。

ところが一方で、この1920年代後半の非常に急激なパランジー掃蕩キャンペーンは、一部の保守的な人々の間に、実は猛反発を起こしているんですね。パランジを棄てた女性に対するさまざまなハラスメントが枚挙にいとまがないほど起こりました。そのうちの最も過酷なものは、パランジを捨てた女性に対する身内の男性による暴力です。時として、刃物で身体を傷つける、生きたまま火を付けるということにまでおよぶような事件にまで

発展しました。これは現在、人類学などと言われるところの名誉に基づく暴力、名誉殺人に該当すると思われます。多くの場合、家長の男性は、パランジを脱いだ女性が身内から出たということは、すなわち家の恥だということで、家長の務めとして自分の娘や妻を自ら手につけ、地元のコミュニティではそういった男性たちをむしろ称賛する傾向さえあったとされています。上からの性急なパランジ根絶キャンペーンは多大なウズベク人女性の血の犠牲を生むことになったのです。こういった状況のもとでは、女性たちはパランジをいったん捨てたけれども、やはり家族やコミュニティの圧力によって再び着用するようになったとか、あるいは党の会合のときには脱ぐけれども帰るときにはまた着るという手段を講じざるを得ず、集会のパフォーマンスでパランジを燃やしてしまったので帰る途中で新しいパランジを買って帰らなくちゃ、という歌が流行したというような記録も残っています。また、妻にパランジを捨てさせるくらいなら、共産党員をやめるほうを選択したウズベク人男性共産党員もたくさんいたということが報告されています。そういうことで、1920年代後半のキャンペーンは、あまりにも苛烈な反発を受け、パランジ根絶運動はとん挫するという経緯があり

ました。パランジがウズベキスタンの日常の風景から消えていく大きな契機となったのは、男性たちの多くがソ連兵として出征していた第二次世界大戦だったと言われています。

6. 何を着るべきか？

それでは、パランジを捨てたら女性たちはどういう服装をするべきだったのでしょうか。これは当時かなり深刻な問題だったようです。パランジを捨てるとしても、やはり現地の人々の価値観を尊重するとすれば、あまり手足を極端に露出するのはタブーとされていましたし、体の線を強調することや、服装ではないですが、髪の毛を短く切るといようなことも、タブーでした。女性たちがパランジの下に着ていた服は、その当時の感覚としては部屋着もしくは下着だったということで、単にパランジを着用せずに、そのままの姿で外に出ることには、女性たちは非常に大きな心理的抵抗を持っていたようです。共産党においても、それでは「正しいウズベク人女性」の服装とはどんなものかという議論があって、ヨーロッパ風の服装がいいのか、あるいは民族的な要素を残した服装がいいのか、様々な意見があったようです。ある研究者によると、そういった議論のなかでは、パリ風の靴に絹のストッキングというような魅力的なスローガンも出てきたりして、とてもプロレタリアートの国とは思えないような、贅沢な感じがしますね。何を着るべきかという問題の一例をあげると、ウスト・ムミン（本名 A. ニコラエフ）というロシア人画家—この人はかなりプロパガンダ的なポスター製作にも携わりました—が描いた『パランジを脱いだ娘』という絵があり、白いブラウスに黒っぽいスカート、短髪でいかにも颯爽とした若い女性がノートや本をかかえずんと道を進んでいく様子が描かれています。図3は、『新生活』という雑誌に1937年に掲載された、「ウズベク人女性のためのヨーロッパ風の服装」の提案です。まさに「パリ風の靴に絹のストッキング」という表現があてあまるような服装ですね。

現実的な選択としてはどうだったかと言いますと、ゆったりしたワンピースの下にズボンをはく—これはほとんどパランジの下に女性たちが着ていたものだと言っていいと思うのですが—そして頭には緩やかにスカーフをかぶるというか、乗せるというか、そんなスタイルが採用されていきました。色彩の鮮やかな伝統的な絹緋地がワンピースやズボンに使われました。だんだんと都市部で

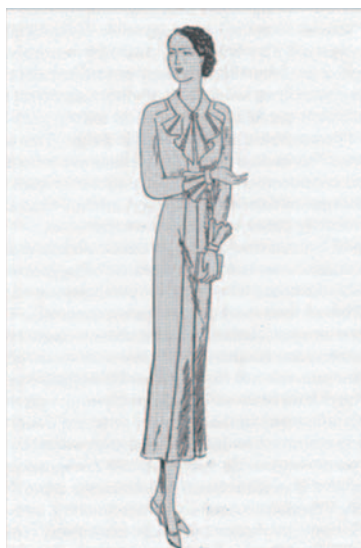


図3 「何を着るべきか？ウズベク人女性のためのヨーロッパ風の服装」（雑誌『新生活』Yangi turmush 1937年第1号掲載の記事「何を着るべきか」より）
[Northrop 2004: 132]

は私たちとあまり変わらないような洋装の人も多くなりましたし、夏はズボンをはかない人も出てきました。そして、特に都市部ではスカーフの着用も徐々に減少していきました。写真10はソ連時代末期に刊行されたフォト・アルバムからのもので、首都タシュケントの女性たちです。写真11は独立後の、かなりショーアップされた民族アンサンブルの写真ですが、右から2人目のスタンドマイクで歌っている女性のこの服装が、20世紀中に定着したウズベク人の民族服として標準的な感じのものだといえます。絹緋のワンピースの下にズボンをはいています。写真12は独立後の農村部で撮ったもので、女性たちのグループが聖者廟のお参りに来たところですが、服地はさまざまですが、ゆるやかなワンピースはだいたいみな同じような形ですね。



写真10 1980年代のタシュケント市内の女性たち
[Penson 1989: [15]]



写真 11 N. ウタルベコフ氏より提供



写真 12 マルギラン近郊の聖者廟にて（筆者撮影）

一方、こちらの写真 13、写真 14 は、タシュケントのブロードウェイと呼ばれた、市内中心部の、最もおしゃれな若者が集まる歩行者天国で撮った写真です。ここでは絹緋などの服を着ている人は少なく、思い思いの洋装が主流です。写真 14 のように、体の線がかなりあらわになるジーンズをはいたり、ノースリーブを着る女性も見られます。

こうして見てきますと、1920 年代以降、ウズベク人女性が社会に出る時の装いは長い時間をかけて、パランジの根絶を経て、推移してきたことがお分かりいただけたのではないかと思います。そこに今度はソ連解体後、イスラーム・ヴェールが登場、もしくは復活してくるわけです。現在のウズベキスタンではこれは一般的に「ヒジョブ」と呼ばれています。アラビア語ではヒジャーブですね。ペレストロイカ、ソ連解体、独立という流れの中で、社会の自由度が増し、民族文化の復興が主張され、伝統回帰志向が起こってきます。ウズベキスタンでは、伝統回帰的な内からのイスラーム復興と、新しい潮流の流入という外からのイスラーム復興の両方の波が起こりました。さらにはグローバリゼーションによってさまざまな文物が周囲から入ってくるようになります。イスラーム・ファッションもそうした流れの中から現れてきた



写真 13, 14 タシュケント市内の通称ブロードウェイにて（筆者撮影）

のです。ウズベキスタン政権の側では、独立後の好ましいイスラームのあり方を非常に熱心に追求してきましたが、為政者たちはやはりソ連的な世俗主義の申し子なのであり、パランジが悪しきものとされたのと同様の視線をヒジョブに対しても向けていることが読み取れます。

パランジとは異なる、つまり中央アジアの伝統的なスタイルではないイスラーム・ヴェールというのは、私が見たところ、1990 年代にはイスラーム関連施設などでごくまれに見られた程度だったと思います。写真 15 はナクシュバンディー教団教祖の墓廟に参詣に来た女性たちです。写真 16 は犠牲祭のときの女性だけのお茶会ですが、同席している女性のうち 1 人だけがヴェールをつけています。いずれも白い無地のスカーフです。2000 年代になりますと、イスラーム関連施設とは関係のない場所にもトルコ風、あるいは東南アジア風と思われるようなスタイルでヴェールを着用した女性が増えてきます。それと同時にそうしたスタイルのヴェールが「ヒジョブ」と呼ばれるようになり



写真 15 ナクシュバンディー廟にて（1997 年筆者撮影）

ました。冒頭にお話しましたように、ヒジョブをつける女性は目に見えて増えていますが、当局側はこれを警戒し、着用する女性を説得したり指導したりするのにかなりエネルギーを割いているようです。



写真 16 タシュケント市内のあるウズベク人家庭でのお茶会（1996 年筆者撮影）

さらにいくつか写真を見ていただきましょう。いろいろなかぶり方をしている人がいて、私自身もまだよく整理がつきませんが、写真 17～写真 20 のように、多様化して華美になっており、しばしばトータル・コーディネートされていたりして、おしゃれに敏感な女性たちが、手間もお金もかけて楽しんでいるという印象があります。写真 21、写真 22 のように、少女あるいはまだ幼児といったもよいような女の子がヴェールを着けるというのは、ウズベキスタンでは新しい現象だと思います。

ところで、図 4 に示したように、ヴェールやスカーフの類は、「ヒジョブ」以外にも、ウズベキスタンにいろいろあります。どれがイスラーム・ヴェールか、「ヒジョブ」か、というと、ポイントはおそらく、髪を見せないだけでなく額をほぼ全部ぴっちり隠し、そして顎の下にもスカーフをまわすことで、顔の周囲がスカーフにすっかりくまれている状態になっているものがヒジョブだと言えそうです。ですから、これらの写真の中では、①、②、④、⑤はヒジョブではないんですね。



写真 17-22 タシュケント市内にて（2009 年筆者撮影、左上から右向きに配置）

どれがヒジョーフ?



図4 現代ウズベキスタンのスカーフとヴェール（写真はいずれも筆者撮影）

7. ヒジョーフ問題のその先に

さて、冒頭の問いに立ち戻りましょう。ムスリム人口が9割を占めるウズベキスタンでイスラーム・ヴェールが公的には「好ましくないもの」とされるのはなぜか。この問いには、ここで見てきたような長い20世紀中の歴史的経験を経て、イスラーム・ヴェールの根絶が近代を象徴するという図式が、ソ連時代を生きた、少なくとも一部のウズベキスタンの人々のなかで骨肉化されているからだと思えます。

そして、最後になりますが、その先にはどんな問題があるのでしょうか。イスラーム・ヴェールに嫌悪感を示すような人たちというのは、ウズベキスタンの政治エリートであったり、都市の知識人だったりします。その一方で、仮に伝統主義者という名前を付けることにしますが、イスラーム・ヴェールを容認するか、あるいは推奨する人たちがいて、この伝統主義者は民族的な価値観とほぼ一体化したイスラーム的な価値観を重視します。現状を見るならば、この両者の間に対話が成り立たないという状況が生じていて、ウズベキスタンではそれが今、国民統合にも影響を与えかねないほど、非常に深刻になりつつあると私は認識しています。

イスラーム・ヴェールの問題は、いろいろな角度から議論が可能で、中東・イスラーム研究においてもかなり議論の蓄積があります。が、やはり私はこの問題を社会主義的な近代化と結びつけて考えたいと思っています。パランジの根絶に象徴された近代を今の視点からもう一度再検討して、咀嚼し直す、そして、独立後の現状のなかで、あらためて近代とは何かを考えなければならないのだらうと思っています。国民の間で異なるイスラーム

観をどう調整していくか、自由とはどういうことか、ヴェールを付ける自由と付けけない自由の重みは同じか、政教分離を貫けるか、こうした問題は今後ますます真剣に問われていくようになるでしょう。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- Khodzhaev, F.
1989 *Uzbekistan. otkrytym serdtsem: povest' o zhizni i tvorchestva Maksy Pensona*, Tashkent: Izdatel' stvo literatury i iskusstva im. Gafura Guliyama.
- Northrop, D.
2004 *Veiled Empire: Gender and Power in Stalinist Central Asia*, Ithaca and London: Cornell Univ. Press.
- Penson, Miron M.
1989 *Raduga zemli uzbekskoi*, Tashkent: Mekhnat.